しごとインタビュー INTERVIEW

私の落語に“完成”はない

柳家三三さんは、小学1年生のときに落語に興味をもち、中学2年生で将来は噺家になると決めました。今は落語を中心に幅広く活躍する日々ですが、前座時代の修業が高座で大きな意味をもつと語ります。

● 落語家 柳家三三さん

やなぎや・さんざ●昭和49年神奈川県小田原市生まれ。小学1年生で落語の面白さを知る。平成5年高校卒業後に柳家小三治に入門。平成8年二ツ目に昇進したのを機に「三三」を名乗る。平成18年真打に昇進。「花形演芸大賞・大賞」などさまざまな落語関連の賞を受賞。落語を中心としつつ、俳優や声優などに活躍の場を広げている。

小学1年生で落語に関心をもち 中学2年生で弟子入り志願

――落語に関心をもったのはいつごろですか。

三三　小学1年生のときです。たまたまテレビで見た落語がとても面白かったんです。いわゆる「廓噺（くるわばなし）」というものでした。もちろん小学1年生ですから廓がどんなところか全くわかりませんでしたが、世の中には落語というとても面白いものがあるんだと知りました。やがて落語の本を読むようになり、中学生になると月に1～2回は、東京の寄席に通うようになりました。中学2年生のときには、将来は噺家になると決めていましたね。

――ずいぶん早く自分の将来を決めたんですね。

三三　噺家になるなら早いほうがいいだろうと思い、中学2年生の3学期に、後に師匠となる柳家小三治に「中学を卒業したら弟子にしてほしい」というお願いの手紙を出しました。そしたら「一度会いに来なさい」という返事が来たんですよ。

たまたま中学生ということで師匠の目に留まったのかもしれません。指定された日時に訪ねたら、「だめだよ」と断られました。その理由は「中学を卒業しただけでは、知識も不十分で人生経験もない。それではお客様の心を動かす落語はできない。今の噺家は、昔と違って高校を卒業しているのが当たり前で、大学を出ている者も珍しくない」ということでした。

師匠は高校に行ったら卒業するまでに別な道を見つけ、噺家になるのをあきらめるだろうと考え、そのような話をしたようです。ところが私は「高校を卒業すれば弟子にしてもらえるんだ」と思ったんですね。それで高校3年生の冬に再び弟子入りをお願いするために訪ねたら、「来ちゃったのか」と困った顔をしていましたね。

――それだけ落語がお好きだったということですね。

三三　確かに落語が好きで噺家になろうと決めたわけですが、一方では勉強が嫌いだったということもありました。私の通った高校は、自由な校風で勉強を強制するような雰囲気はありませんでしたが、入学して間もなく進路についての面接がありました。その面接で「将来は噺家になるつもりなので、私に対する進路指導は必要ありません。その分、他の生徒の指導に時間を割いてください」と先生に話しました。また、嫌いな勉強をするために、親に学費などを負担させるのも嫌でしたね。

意外に思われるかもしれませんが、私は人前で話すことが苦手なんですよ。今でも落語以外ではあまり人と話をしない。そういう意味では、自分に噺家としての適性があるとか、才能があるとか考えずにこの世界に入ったわけです。私にとっては嫌いな勉強から逃げ込む所が落語だったということでしょうか。

三三さんは「そのときのお客様の空気を読み、一番合った演目を決めたい」と言う。

前座時代の修業があればこそ お客に合った落語ができる

――落語界では前座、二ツ目、真打と昇進していくのですね。

三三　前座はたまに高座で落語をすることもあるけれど、主な仕事は、高座に上がる人たちに対して楽屋で補佐をする…例えばお茶を入れたり、着物の着替えを手伝ったり、脱いだ着物をたたんだりすることです。前座には他にも多くの仕事がありますが、要するに、出演する人た

●「しごとインタビュー」のバックナンバーがウェブサイトで読めます。
（雇用問題研究会ホームページ）http://www.koyoerc.or.jp/sigoto.html

ちが高座で気持ちよく落語ができるように準備をするということですね。また最初のころは師匠の家に通い、あるいは住み込みで、洗濯や掃除などもします。

普通、前座の期間は3～5年間くらいですね。その後、二ツ目という立場になり、高座で落語をして、一席いくらというお金をいただくことができます。

――前座時代はなかなか厳しいようですね

三三　私は前座時代、日々の仕事をこなすのに必死で、それが噺家としてどんな役に立つのか考えもしませんでしたし、教えられたこともありませんでした。しかし今から振り返ると、前座としての修業はやはり大きな意味があったと思います。師匠の家族にとって、少なくても当初は私はどこからかやってきた異物です。その異物が掃除や洗濯をすると

三三さんのオフィシャルサイト（URL：http://www.yanagiya-sanza.com/）。出演情報などを確認できる。

いっても、うっとうしいだけでしょう。でもしばらくすると、邪魔にならない存在、そして必要な存在になってくるんです。それは私が師匠の家族の中で、人との距離の取り方、身の処し方を覚えたからです。

さまざまな噺家が集まる楽屋でも、前座は人との接し方を学びます。同じ接し方をしても、ある噺家には怒られ、別な噺家では何の問題もないということもあります。やがてこの師匠にはこう接すれば、気持ちよく高座に上がってもらえるということがわかってきます。今の言葉で言えば「空気を読む」ことができるようになるわけですね。

それは二ツ目となって高座で自分が落語を演じるときに、お客様がどんなことを求めてこの場に足を運んでくださっているのかを把握するのに繋がるのです。

私はできるかぎり、事前に演目を決めないようにしています。そのときのお客様の様子を見て、どんな落語をするのかを決めたいんです。あらかじめ決めてしまうと、その演目がそのときのお客様に合わないと思っても変えることができない。お客様の空気を読む、それはニーズを察知するということです。前座とはそうした力を養うための修業をする場ではないか、今はそんなふうに考えています。

――真打になったときは、どのような感慨をもちましたか。

三三　真打になる際には、方々にご挨拶をしてお披露目をします。それは師匠をはじめ、兄弟子やお客様など多くの方の協力があってはじめてできることです。真打になるということは、ともすれば、ここまできたのは自分の力だと思ってしまう思い上がりを諌めてくれる機会なんだ、ということを実感しましたね。

真打になって自分の芸が完成するわけではなりません。自分が一人前になったと思ったら、それ以上いい落語ができなくなってしまうんです。私はもっといい落語ができるようになるのはどうすればいいか、常に自分に問いかけています。噺家一人ひとり、落語に対する考え方は違うので、「これだ！」という正解はないのですが…。

お客に直接笑いをぶつけずに落語の世界を楽しんでいただく

――どんなときにやりがいや面白さを感じますか。

三三　自分がこうすれば一番いいと考えた落語に対して、お客様が面白いと感じてくださったときですね。私は、お客様を面白がらせるために、直接笑いをぶつけるようなことはしないようにしています。噺家がお客様を面白さに強引に引っ張り込むのではなく、お客様がご自身の想像力で、その場所に自ら寄っていく。言い方を変えれば、噺家とお客様の間に落語という面白い世界があり、お互いがそこに近づいていくと言えばよいでしょうか。私の落語を聴いてくださるお客様が、自然と落語の世界に入る、そんな落語を演じたいですね。それは師匠の小三治の落語のスタイルでもあります。

――声優や俳優など、落語以外の分野でもご活躍ですね。また「柳家三三GO！GO！47都道府県」と銘打って、47日間ですべての都道府県を回って落語をするというユニークな活動もされました。

三三　落語の他にいろいろなことを経験すれば、幅広い見方や考え方が身につき、噺家としての技術も向上するのではないかと考えています。

また飽きっぽい性格なので、ときどきは自分にプレッシャーをかけないといけないんです。47日間の公演ツアーもその一つです。追い込まれて「どうしよう」という状態のとき、必死で頑張ると、何かが開けたようになり、それまでとは違う自分になったという感覚があるんです。

噺家は、修業をしていても右肩上がりで順調に成長するわけではありません。成長の後には停滞があり、しばらくするとまた成長する。こうして成長と停滞を繰り返しながら、だんだん上に昇っていくのだと思います。停滞があったからといって、元に戻るのではない。それまでとは違う自分がそこにいるという感覚がとても楽しく感じるんです。